

「時代の節目」というものは、その規模が大きい場合、渦中にいる者には分かりづらい。とりわけ、世が変わり始めた最初の段階では、新たな時代に入りつつあることに、なかなか気づかないものだ。

昨年私は、「文明探偵の冒険——今は時代の節目なのか」という新書を上梓（じょうし）した。これは、時代の節目とは何か、またそれが生じる原因や背景、いかなる要因が節目の規模を決めるのかなどについて、さまざまな角度から探っていくという試みだ。

詳細については別の機会に譲るが、そもそもこのような一風変わったテーマで本を書こうと思ったのはなぜか。それはやはり、今が「本格的に」時代の節目ではないか、と感じていたからである。

「本格的」とは、要するに長い周期の節目ということだ。たとえば、十年続いたことが終わるという節目よりも、百年ぶりの節目のほうが本格的であろう。



さて、私たちが節目の到来に気づきにくい理由は、色々考えられる。

まず、社会心理学者が明らかにした、「**正常性バイアス**」がヒントになる。これは、**自分にとって不都合な出来事が起きても、「きっと大したことではないはずだ」と、つい都合よく解釈してしまう心理的な特性のこと**である。実際、2003年に韓国で起きた「大邱（テグ）地下鉄放火事件」では、煙が充満しているにもかかわらず、乗客が逃げようとしないう姿を撮った写真が残っている。その結果、200人近い犠牲者を出す歴史的な大事件となった。原因の一つには、この心理的メカニズムの悪影響があったとされている。

もちろん、普段と違うシグナルを検知したからといって、それが真に警戒すべきものの前兆を捉えているとは限らない。だから私たちは「まれなことは、まず起きない」という「常識」によってフィルターをかけ、認知的な負荷を軽減させて暮らしている。だがこれは要するに、センサーの感度を鈍くする、ということだ。目先のことに集中しているうちに、時代に追い越されていた、ということも起こりうるだろう。

もう一つ、**私たちの世界が、個別の要素が互いに作用し合う「システム」として存在している**ことも、「時代の節目」が見えにくい理由かもしれない。例えば精密な機械では、その部品の一つが故障しただけで機能しなくなることがよくある。これは逆に言えば、機械を組み立てていき、最後の部品を組み込んだ瞬間、やっと全体が動き出すということである。**大きな時代の変化も、その本質がシステムとして作動するものならば、新時代の要素のほとんど全てがそろったとしても、最後のピースがはまるまでは、私たちはそれを認識できないことになる。**

他にも理由はあろうが、いずれにせよ私たちは、「時代の節目」というものを、基本的には回顧的に認識するよりなのだろう。だから**大多数の人たちが「これは時代の節目ではないのか」などと思い始めた時には、世界はもうすっかり新時代にのみ込まれた後、**ということになる。



実に長い前置きになった。私は、米大統領選での**トランプ氏の勝利はある意味で、その「最後のピース」**だったようにも感じている。では、この変化の流れの始まりは、どこまでさかのぼれるのか。どのくらいの長さの周期の節目なのだろうか。

これは簡単な問いではない。だがトランプ氏の登場は少なくとも、**欧州統合というプロジェクトに対して英国国民から離脱の意思が示されたことや、近年の世界各国におけるナショナリズムの高揚**などと、同期していると考えられる。そこに浮かび上がってくるのは、いわば「**国家の逆襲**」である。**グローバル化の中で弱体化していくかに見えたそれが、再び主役の座を占める時代に逆戻りしたことは、ほぼ間違いないのではないか。**これは「**冷戦後**」と

いう時代の終焉（しゅうえん）をも意味するはずだ。

ただ、今が別のもっと長い周期の節目と重なっている可能性もある。

たとえば、トランプ氏の身もふたもない言葉遣いに人々が票を投じた本当の理由は、長年、アメリカ人を支えてきた重要な軸の一つが折れたためではないだろうか。かつてメイフラワー号に乗って新大陸に渡り、自らを「神に選ばれし民」と信じ、歯を食いしばって、世界に対しておせっかいなまでに「理想の旗」を掲げ続けてきた、あの真面目なアメリカ人たちは内心、そろそろやせ我慢も限界だ、と思っていたのかもしれない。そのような集合的無意識と、彼の穏やかならざる言葉が見事に共鳴してしまったのではないか。

むろん、米国が内向きになることは過去にもあったから、この見立ては軽率かもしれない。だが仮に正しいとすれば、米国は建国以来の大きな曲がり角に来たことになるだろう。

ともかく、状況の深刻さについて、各国政府もメディアも専門家も、適切に評価できていなかったことは、事前の選挙予想に顕著に表れている。とりわけ**エスタブリッシュメント（既得権層）**と言われる人々ほど、「**正常性バイアス**」にとられる傾向が強かったように思う。

今のところ、日本政府の対応も、ほぼ従来通りのままだ。確かに、トランプ政権は未知数の部分も多いが、本質的には、「**次の時代**」に私たちがもう投げ込まれていると覚悟すべきだろう。さもなくば、いたずらに時間を浪費することにもなりかねない。トランプ氏の言葉を都合よく解釈せず、**新時代と真っ正面から向き合うことが、求められている。**

かみさとたつひろ

1967年生まれ。千葉大学教授。本社客員論説委員。専門は科学史、科学技術社会論。著書に「文明探偵の冒険」など

<この文書は、「**脱成長経済・ポスト現代資本主義**」（[下記URLをクリック](#)）に掲載されているものです。>

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2013/04/post-a6fd.html>